



TITLE:

書評 Dan Lloyd: Radiant Cool—A
Novel Theory of Consciousness
(MIT Press, 2004, xvii+357p.)

AUTHOR(S):

呉羽, 真

CITATION:

呉羽, 真. 書評 Dan Lloyd: Radiant Cool—A Novel Theory of Consciousness (MIT Press, 2004, xvii+357p.). 哲学論叢 2008, 35: 242-245

ISSUE DATE:

2008

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/96262>

RIGHT:

書評

Dan Lloyd: *Radiant Cool—A Novel Theory of Consciousness* (MIT Press, 2004, xvii+357p.)

呉羽 真

本書は標準的な学術書の体裁を採らない。副題の *A Novel Theory* は、「新しい理論」と共に、「小説／理論」をも意味する掛詞になっており、その名の通り、本書は小説と理論の二部から成る。著者は様々な趣向を凝らして、読者を飽きさせることなく意識についての新しい理論、「神経現象学」（この言葉は故 F. ヴァレラに由来する）の理論へと誘う。

第一部の小説はミステリー仕立てになっている。哲学（現象学）を専攻する大学院生である主人公ミランダ・シャープは、行方不明になったマックス・グルー教授を探しながら、意識の謎に迫る。著者であるダン・ロイド自身も小説の中に登場する。ミランダは彼と共に意識についての新しい理論を発見し、またマックスの行方をも突き止めるのだが…。

第一部は、その小説としての面白さもさることながら、第二部で展開される理論への導入の役割を果たすものである。そこでは意識の謎とその解決策となる理論が提示され、読者の好奇心を掻き立てると共に、第二部において用いられる、時間性の現象

学や、統計学の次元的思考と多次元尺度構成法、認知科学のニューラル・ネットワーク・モデル、脳科学の fMRI などといったツールの紹介が巧妙に話の中に組み込まれている。

第二部は、この新しい理論についての解説である。著者が目指すのは、意識についての科学的理論を打ち立て、これによって意識を自然の中に位置づけ、解明することである。しかし、意識の解明を目指す近年の認知科学の試みは、厄介な問題に突き当たっている。これは、なぜ脳のような物理的システムから意識経験が生じるのか、という問題 (D. チャーマーズが定式化したいわゆる意識の「難問」) である。著者は、意識の解明を躊躇させる間違った諸前提を斥け、意識の哲学と科学を念頭に置きながら、意識がもつ様々な側面を一つ一つ解明していくことを目指す、神経現象学のアプローチを提案する。

さて、こうして作業に取り掛かるに当たって、しかし認知科学が持ち合わせている概念的道具は役に立たない、と言う。認知科学は意識を持った心を、外部状況を探知する「探知局 (detectorheads)」と見なして研究してきた。ここでは、三人称的観点から、探知局の内部と外部が照応されている、ということが前提されている。しかし、意識が意識であるためには外部と対応している必要はなく（我々は「水槽の中の脳」であるかもしれない）、意識はその内的構造の

みに依存している。また、意識が拠って立つ一人称的観点からは外部にアクセスできないのであるから、内部と外部の世界との対応関係を示すものは何もない。従って、認知科学は間違った前提に依拠しているものであり、意識の問題に答えるための出発点は、認知科学の道具箱とは別のところに求めなければならない（この道具箱は後で現象学を具現化するために用いられる）。

しかし、我々はおも、我々がこの世界を実在の世界として経験している、という事実突き当たる。そこで、実在そのものではなく、実在があるという信念から出発することができる。すなわち、フッサールによって創始された、実在世界の経験についての現象学を出発点に据えるのである。これは、主観性を客観的に見る見方から、客観性を主観的に見る見方へと向きを変えることを意味する。その目的は、あるシステムが意識経験を行うようなシステムであるために具えていなければならない特異な構造を特定することにある。

フッサール現象学は、意識の働き方を明らかにするために、世界の实在性についての信念に「エポケー（判断中止）」を加え、意識の外部にあると信じられた世界を「括弧に入れる」という方法を採用。これによって、すべてのものは、外部に対応物を持たないような現象であるかのように捉えられる。一人称的に経験された実在は、括弧に入れられた〈実在〉と区別される（著者は、前者を実在、後者を山括弧付きの〈実

在〉と表記して、両者の区別を示す）。

この方法によって明らかにされるのは、〈実在〉の世界を括弧に入れてもまだ残る、意識と実在との区別されつつも切り離せない関係、すなわち「志向性」の名で呼ばれる主観 - 客観の相関関係である。簡単に言えばこれは、客観が私の経験の中で常にある視点に相対的な仕方で見れる、ということである。認知科学が見落としてきたのは、志向性が意識の内部と〈外部〉の関係ではなく、意識そのものの基本構造である、という点である。

もう一点、意識経験の構造に関して現象学が教えるのは、私がある客観を経験する際、常に何らかの解釈を行っている、ということである。例えば、私が闇夜に飛び交う光の点を見るとき、私は「純粋な刺激」を経験しているのではなく、それを「蛍だ」、「UFO だ」などの解釈の下で見ている。志向性と同様に認知科学が見逃してきたこうした解釈の存在は、意識が感覚的側面に加えて、非感覚的側面を持つ、ということを含意する。フッサールが「統握（Auffassung）」と呼んだ解釈の働きを、著者は感覚的なものと非感覚的なものの「重層化（superposition）」として取り上げる。重層化のおかげで意識経験は単に感覚が告げるものよりも豊かなものになっているのである。この点は、意識の問題をクオリアの問題へと矮小化してきた心の哲学に対する批判的視座を提供する。

実在が具えている非感覚的な特性の中

で、すべての実在に共通するのは、それが空想上の客観と違って、意識を「超越」したものとして経験される、ということである。実在は、常に経験の進行の中で汲みつくせない側面を持つのである。客観の実在性を確証するには、現在において現前しているものを、過去において現前していたものや、未来において予期されるものと比較することが必要になる。すなわち、実在的な事物は時間的延長を有する、ということを経象学は教える。

フッサールは、『内的時間意識の現象学』において、経験を可能にするような意識の時間性について記述した。彼によれば、現在の意識は、現在において現前しているもののみから成り立つのではなく、「把持 (Retention)」および「予持 (Protention)」と呼ばれる働きによって、それぞれ過去において現前していたものと、未来において予期されるものが重層化されるという仕方で成り立つ。実在性の現象学が明らかにしたのは、時間的に持続した実在的客観の経験を可能にする意識の働きの基礎にあるのが、現在、過去、未来から成る時間性の三項構造である、ということである。

現象学の助けを借りて、意識経験を行うシステムが具えていなければならない構造が明らかにされた。しかし、著者が提示しようとしている理論の目的は、意識を自然の中に位置づけることである。そこで、再び主観性を客観的に見る見方へと立ち帰り、上記のような構造を、いかにして物理的シ

ステムが具現化しているのかを示さなければならない。

この課題を達成するための作業は、二段階に分けて進められる。すなわち、第一段階では、人工的ニューラル・ネットワークを用いてコンピューター上に単純な脳のモデルを構築し、そのシミュレーション実験を通して、ある種の物理的システムが三項からなる時間性の現象学を具現化する可能性を示す。その結果、一段階前の自己自身の状態をフィードバックする単純回帰型ネットワークがこの種のシステムとして適していることが明らかにされる。また、この実験では、脳の複雑な働きを理解するための解釈技法の試運転がなされる。まず、ニューラル・ネットワーク・モデルの働きを解読するために、もう一つ別のメタネットワークが構築される。さらに、第一部で紹介された次元的思想と多次元尺度構成法が活躍する。次元的思想はネットワークの様々なユニットの活動を多くの次元で表すことができ、多次元尺度構成法は、これらの次元をわかりやすく二次元ないし三次元に変換することができる。

第二段階では、この解釈技法を用いて、様々な認知タスクに従事している被験者の脳の一連の fMRI 画像を分析する。訓練されたメタネットによって、ある段階の脳画像から、直前および直後の脳状態を構築することができる。これは人間の脳の活動パターンが、意識の重層化の働きに対応する仕方で、過去および未来のパターンをコー

ド化していることを示す。すなわち、一連の脳画像から把持と予持に当たるものが抽出されたのである。こうして、現実の脳が時間性の現象学を具現化していることが示され、意識は自然の中に位置づけられる。

ここまで、著者が提示する意識の新しい理論について解説してきた。最後に、これに論評を加えよう。評者は、現象学と認知科学の両者を用いてとにかく意識の研究に着手し、経験的レベルで成果を上げようとする、という著者の基本姿勢には全面的に賛同したい。また、現象学的着想に基づいた認知科学批判は明快で的を射ている。統計学的手法を用いた解釈技法の正当性は容易に判別しがたいが、そこに閃くアイディアには十分吟味の余地があると思われる。

しかし、脳が現象学を具現化している、という結論には慎重にならざるを得ない。脳画像の分析は、脳が連続的な流れにおいて変化する、という一見平凡な結論を引き出すに過ぎないように思える。また、メタネットが外部からある段階の脳画像からの過去および未来の脳の内部状態の構築に高い確率で成功するという結果に基づいて、脳が把持および予持の働きを具現化していると帰結することの内には飛躍がある。なぜなら、把持および予持とは、意識自身が過去に現前していたものを引きずり、未来に予期されるものを待ち受ける働きであるのだから。ただし、この飛躍は、意識を客観的に解明しようとする試みが必然的に孕

まざるをえない問題とも言える。

また、著者の現象学理解にも難点がある。著者が参照しているフッサールの文献は僅かなものであり、中期フッサールの観念論的、独我論的傾向を拡大解釈している嫌いがある。フッサールは後期に至ってむしろ、意識が身体化を契機として間主観的な生活世界に内属するという事実 zu 焦点を当て、身体の現象学への道を拓いた。著者の現象学解釈がこうした後期フッサール以降の現象学の豊かな成果を無視していることは否めず、その結果、ハード・プロブレムの問題設定の根底にある間違った二元論的枠組みを克服することに成功していない。

とは言え、本書が持つ読み物としての面白さは、特筆すべきである。この面白さの主たる要因は、多彩なメタファーの駆使にある。最も顕著なのは、脳と意識のメタファーである。さらに脳と意識の両者は、物語というメタファーを通して語られる。これが、神経現象学への導入が小説という形式を採らなければならなかった理由である。そして、心のモデルを作る、という認知科学の試みが、現象学の主題の一つである「他者の再構成」と読み替えられる。「心」と「他者」とは、密接に関連した主題なのだ。刺激的な書物として、一読を勧める。

本書の邦訳は、2006年に『マインド・クエストー意識のミステリー』（谷徹・谷優訳、講談社）の名で刊行されている。